

戦火に散ったマスコット ⑨

名古屋軍 石丸進一投手

年が替わってから振り返るのも何だが、昨季の野球界は中日が53年ぶりの日本一に輝き、夏の甲子園では伏兵・佐賀北高校が快進撃を続け、優勝旗を手にした。プロアマ2つの胸上げを目にして、ある大投手が僕の脳裏に浮かんだ。中日の前身、名古屋軍の石丸進一投手である。佐賀商業出身の石丸は、第2次世界大戦の犠牲となった職業野球選手の中でただひとり、特攻で戦死した悲運のケースである。

（新聞うずみ火記者・吉岡 雅史）

“石丸のゼロ戦”復元 戦死者の無念後世に

佐賀で一大プロジェクトが立ち上がったのは、2004年のことだった。それは石丸の生涯を描いた映画に登場したゼロ戦を復元しよう、というもの。

「佐賀県が生んだ石丸進一の無念を形にして、平和の象徴としたかった」。作業の大部分を担い、神崎市で板金塗装業を営む馬場憲司さん（58）は、こう話した。



（上）佐賀で復元されたゼロ戦
（左）作業を引き受けた馬場さん（左）、中央は見学に来た佐賀市長の秀島市長

実物大のゼロ戦は、馬場さんの工場の従業員も駆り出して、1年7カ月をかけて、無事、戦後60年の節目の年に完成した。「一応、飛行は可能です。構造上、着陸に不安があるので、飛ばしたことはありませんが、いい出来だと思えます」と馬場さんは自負している。以来、馬場さんの工場には、全国から見物客がやって来る。「もっと野球やりたかったでしょう、石丸さんは……」。馬場さんは機体を見つめながらつぶやいた。きっと、復元されたゼロ戦を目にしたすべての人が、同じ思いを抱いたに違いない。

そこにきて、ゆかりの地である佐賀と名古屋から、優勝チームが同時に出た偶然に「きっと天国の石丸が何かを伝えようとしている」と想像するのは、自然な発想ではないだろうか。

小細工なしの「いひゅうもん（異風者）」

石丸進一は1941（昭和16）年に、名古屋軍に入団した。正二

俺から野球ば奪い取ったのは

どこのどいつじゃ

墨手だった兄の藤吉はこの年、応召していたが、初の兄弟プロの誕生である。当初、進一は内野手だったが、2年目から投手に転向すると、いきなり17勝。小柄ながら、体全身を躍動させる真つ勝負の投球スタイルは、「しいて言うなら、野茂に近い」という説もある。

己の感情を素直に表現するのが下手で、要領よく立ち回ることなどできず、頑固一徹——こういうタイプを佐賀では「いひゅうもん（異風者）」と呼ぶそうで、石丸もその典型だった。きわどいコースの球をキャッチャーがミットを動かして審判にストライクと言わせようとすると、「俺はごまかすことは大嫌いじゃ」と味方に苦言を呈したという。

小細工なしの「いひゅうもん」は、3年目には20勝をあげ、シーズンも終盤の10月12日の大和戦ではノーヒットノーランを達成



海軍時代の石丸

した。弱かったチームを初めて2位に牽引し、職業野球界に新時代の到来を予感させる働きを演じた。

ノーヒットノーランの快挙直後に召集

ただ、時代が悪すぎた。石丸はプロ入りと同時に日大の夜間部に籍を置いている。徴兵逃れのためだった。しかし、悪化の一途をたどる戦局により、兵役法がこの年10月2日に改正され、学生の徴兵猶予が停止されてしまう。石丸といえど、例にもれず学徒出陣に送り込まれることになった。明治神宮外苑の出陣学徒壮行式は、戦前・戦中最後となるノーヒットノーランの偉業から、わずか9日後のことである。

第14期飛行専修予備学生として筑波海軍航空隊に配属されると、45年2月には神風特別攻撃隊の一員となった。

4月に入って宮崎県の富高基地へと移動する際、寄せ書きに「葉隠武士 敢闘精神」としたため、「日本野球ハ」で筆が止まった。他の隊員から「貴様、この期におよんで、まだ野球か」と詰問されると、「おお、野球じゃ野球じゃ、おれは野球じゃ」と叫んだ。ほどなく鹿児島県の鹿屋基地へ移り、5月10日に「翌朝出撃」の命が下った。

鬼気迫る 別れの10球ストライク

「本田少尉、いっちょやっか」。呼びかけた相手は、法政大学野球部出身で同期生の本田耕一だった。特攻隊員に指名されたあとと石丸は一度、球団事務所を訪れ、赤嶺球団代表からニューボールをもらっていた。「飛行機に積み込んで、最後の最後まで一緒にやあ」と大切に持ってきたボールで、最後のキャッチボールを始めた。

1球ごとに力がこもる。「俺から野球ば奪い取ったのは、どこのどいつじゃい」。鬼気迫る投球に、人垣が出来た。この光景を、海軍報道班員として派遣されていた作家の山岡荘八が見届けていて、戦後、

朝日新聞に記事を掲載している。

（いよいよ出撃の命が下り、司令の訓示が済むと同時に、二人で校庭に飛び出して最後の投球をはじめた。「ストライク！」。今もハッキリとその声は私の耳に残っている。彼等は十本ストライクを通すと、ミットとグローブを勢いよく投げ出し、「これで思い残すことはない。報道班員さようならッ」大きく手を振りながら戦友のあとを追った）（昭和37年8月8日付）

翌朝、ゼロ戦9機で編成された第五筑波隊に、出撃の時がやってきた。やりきれない思いがこみ上げたのだろう。石丸は突然、最後まで一緒に誓ったボールに鉢巻を巻きつけると、操縦席から地

面めがけてたたきつけた。その白鉢巻には「われ人生二十四歳にして尽きる」と書かれてあった。偵察機が撃墜されたため、石丸たちは手探りで敵艦を探さなければならず、離陸から約3時間後、交信が途絶えた。

◆本誌7号で海草中学の嶋清一投手を取り上げたところ、読者の方からFAXをいただくました。「昭和18年の学徒動員とありますが、学徒出陣です。軍には勤労動員。動員と出陣は区別して下さい」というものも、今後注意いたします。「軍歴のある老人」さん、ご指摘ありがとうございます。

いわみせいし のヨコシマ日記

